

古文「自尊敬語」識別 100題ドリル

対象：高校生・大学受験生 | 著作権：誰でも古典塾 (kotennosensei.com) 無断転載禁止

はじめに

自尊敬語（自敬表現）とは、**天皇・上皇・中宮など最高位の人物が、自分自身の動作に尊敬語を使う**特殊な用法です。ふつう敬語は「作者から登場人物へ」「話し手から相手へ」向けるもの。ところが自尊敬語では、

動作する人・敬意を向ける人・敬意を受ける人がすべて同一人物（最高位の自分）になります。

これは**地の文の最高敬語（作者が天皇を高める）と混同しやすいのが最大の落とし穴**です。傍線部を次の**3タイプ（ア～ウ）**に分類しましょう。

記号	タイプ	見分けの軸
ア	自尊敬語	会話・独白で、最高位の人が 自分自身（われ・朕） の動作に尊敬語
イ	通常の尊敬語	地の文で作者が高位者を高める／会話で発話者が 他者 を高める
ウ	謙讓語	自分側の動作を低めて、向かう先の高位者を高める（奏す・申す・参る等）

鉄則 - 三つそろって初めてア。「①会話・独白の中 ②発話者が最高位 ③その動作主も発話者自身（われ・朕）」が**すべて**そろったときだけ自尊敬語。 - **地の文の尊敬語はイ**。 どれほど豪華な最高敬語（させ給ふ・きこしめす）でも、作者が高位者を描いていれば、ただの尊敬語。 - **謙讓語はウ**。 奏す・啓す・申す・参る・奉るなど、自分を低める語。相手（客体）が天皇でも、種類は謙讓のまま。

🎯 解き方のコツ

- まず**〔場面〕**を見る。地の文なら自尊敬語にはならない（イかう）。
- 会話・独白なら、**発話者**を確認。最高位（帝・院・中宮）でなければイかう。
- 発話者が最高位なら、**その尊敬語の動作主**を確認。「われ・朕」など発話者自身ならア。聞き手・第三者ならイ。
- 語が謙讓語（奏す・申す・参る等）ならウ**。動作主が誰でも、自分を低める語はウ。

採点表

部	問題	目標
第1部 基礎	Q1～Q20	18／20
第2部 標準	Q21～Q50	24／30
第3部 応用	Q51～Q80	21／30
第4部 入試	Q81～Q100	13／20

【第1部】基礎（Q1～Q20）

Q1. 次の傍線部「思す」は、ア～ウのどれか。

> 〔帝の独白〕「われ、この世を**思す**に飽かず」

Q2. 次の傍線部「御覧ず」は、ア～ウのどれか。

> 〔地の文〕帝、御簾の内にて月を**御覧ず**。

Q3. 次の傍線部「奏す」は、ア～ウのどれか。

> 〔臣下が帝に〕大臣、事の由を**奏す**。

Q4. 次の傍線部「仰す」は、ア～ウのどれか。

> 〔院の仰せ〕「朕、みづから**仰す**ことあり」

Q5. 次の傍線部「御覧ず」は、ア～ウのどれか。

> 〔地の文〕院、池の汀を**御覧ず**。

Q6. 次の傍線部「啓す」は、ア～ウのどれか。

▶ 〔女房が中宮に〕女房、御消息を啓す。

Q7. 次の傍線部「おはします」は、ア～ウのどれか。

▶ 〔中宮の御言葉〕「われ、今宵はとくおはします」

Q8. 次の傍線部「おはします」は、ア～ウのどれか。

▶ 〔臣下が帝に〕「君はいつくにおはしますぞ」

Q9. 次の傍線部「参る」は、ア～ウのどれか。

▶ 〔地の文〕女房、御前に参る。

Q10. 次の傍線部「思し召す」は、ア～ウのどれか。

▶ 〔帝の独白〕「われ、夜もすがら思し召す」

Q11. 次の傍線部「のたまふ」は、ア～ウのどれか。

▶ 〔地の文〕帝、近き人にのたまふ。

Q12. 次の傍線部「申す」は、ア～ウのどれか。

▶ 〔家来が主に〕家来、ありさまを申す。

Q13. 次の傍線部「御覧ず」は、ア～ウのどれか。

▶ 〔帝の独白〕「われ、この文を御覧ず」

Q14. 次の傍線部「きこしめす」は、ア～ウのどれか。

▶ 〔地の文〕帝、樂の音をきこしめす。

Q15. 次の傍線部「聞こゆ」は、ア～ウのどれか。

▶ 〔女房が姫君に〕女房、わびごとを聞こゆ。

Q16. 次の傍線部「のたまはす」は、ア～ウのどれか。

▶ 〔院の独白〕「朕、かくのたまはす」

Q17. 次の傍線部「思す」は、ア～ウのどれか。

▶ 〔地の文〕中宮、めでたしと思す。

Q18. 次の傍線部「奉る」は、ア～ウのどれか。

▶ 〔臣下が帝に〕臣、御文を奉る。

Q19. 次の傍線部「きこしめす」は、ア～ウのどれか。

▶ 〔帝の独白〕「われ、天の下をきこしめす」

Q20. 次の傍線部「召す」は、ア～ウのどれか。

> 〔地の文〕 帝、楽人を**召す**。

【第2部】標準 (Q21～Q50)

解答：

Q21. 次の傍線部「承る」は、ア～ウのどれか。

> 〔臣下が〕 臣、仰せを**承る**。

Q22. 次の傍線部「思す」は、ア～ウのどれか。

> 〔中宮の独白〕 「われ、いかにせむと**思す**」

Q23. 次の傍線部「御覧ず」は、ア～ウのどれか。

> 〔地の文〕 上、絵を取り出でて**御覧ず**。

Q24. 次の傍線部「まうづ」は、ア～ウのどれか。

> 〔地の文〕 女房、寺に**まうづ**。

Q25. 次の傍線部「仰す」は、ア～ウのどれか。

> 〔帝の独白〕 「われ、重ねて**仰す**べし」

Q26. 次の傍線部「のたまふ」は、ア～ウのどれか。

> 〔臣下が帝に〕 「君はいつの**たまふ**や」

Q27. 次の傍線部「仕うまつる」は、ア～ウのどれか。

▶ 〔地の文〕 家人、よろづを仕うまつる。

Q28. 次の傍線部「おはします」は、ア～ウのどれか。

▶ 〔院の独白〕 「われ、しばし山におはします」

Q29. 次の傍線部「大殿籠る」は、ア～ウのどれか。

▶ 〔地の文〕 帝、夜ふけて大殿籠る。

Q30. 次の傍線部「啓す」は、ア～ウのどれか。

▶ 〔女房が東宮に〕 女房、御事情を啓す。

Q31. 次の傍線部「思し召す」は、ア～ウのどれか。

▶ 〔帝の独白〕 「われ、あはれと思し召す」

Q32. 次の傍線部「きこしめす」は、ア～ウのどれか。

▶ 〔地の文〕 院、申し文をきこしめす。

Q33. 次の傍線部「奏す」は、ア～ウのどれか。

▶ 〔臣下が〕 大納言、勝負の数を奏す。

Q34. 次の傍線部「御覧ず」は、ア～ウのどれか。

▶ 〔中宮の独白〕「われ、いま一度御覧ず」

Q35. 次の傍線部「召す」は、ア～ウのどれか。

▶ 〔地の文〕帝、笛の名手を召す。

Q36. 次の傍線部「申す」は、ア～ウのどれか。

▶ 〔女房が大臣に〕女房、わけを申す。

Q37. 次の傍線部「のたまはす」は、ア～ウのどれか。

▶ 〔帝の独白〕「われ、今ぞのたまはす」

Q38. 次の傍線部「おはします」は、ア～ウのどれか。

▶ 〔地の文〕院、つねに南殿におはします。

Q39. 次の傍線部「参る」は、ア～ウのどれか。

▶ 〔地の文〕殿上人、内裏に参る。

Q40. 次の傍線部「思す」は、ア～ウのどれか。

▶ 〔院の独白〕「われ、口惜しと思す」

Q41. 次の傍線部「御覧ず」は、ア～ウのどれか。

> 〔臣下が帝に〕「君はこれを御覧ずや」

Q42. 次の傍線部「聞こゆ」は、ア～ウのどれか。

> 〔自分が女房に〕われ、つてに聞こゆ。

Q43. 次の傍線部「きこしめす」は、ア～ウのどれか。

> 〔中宮の独白〕「われ、よくきこしめす」

Q44. 次の傍線部「のたまふ」は、ア～ウのどれか。

> 〔地の文〕帝、うち笑みてのたまふ。

Q45. 次の傍線部「奉る」は、ア～ウのどれか。

> 〔臣下が院に〕臣、御琴を奉る。

Q46. 次の傍線部「仰す」は、ア～ウのどれか。

> 〔院の独白〕「われ、かやうに仰す」

Q47. 次の傍線部「思す」は、ア～ウのどれか。

> 〔地の文〕中宮、いとほしと思す。

Q48. 次の傍線部「承る」は、ア～ウのどれか。

> 〔自分が〕われ、院の仰せを承る。

Q49. 次の傍線部「おはします」は、ア～ウのどれか。

> 〔帝の独白〕「われ、今日は内におはします」

Q50. 次の傍線部「きこしめす」は、ア～ウのどれか。

> 〔地の文〕帝、人々の歌をきこしめす。

【第3部】応用 (Q51～Q80)

解答：

Q51. 次の傍線部「させ給ふ」は、ア～ウのどれか。

> 〔地の文〕帝、御簾を上げさせ給ふ。

Q52. 次の傍線部「せ給ふ」は、ア～ウのどれか。

> 〔帝の独白〕「われ、みづから出でせ給ふ」

Q53. 次の傍線部「奏す」は、ア～ウのどれか。

> 〔臣下が帝に〕われ、まことを奏す。

Q54. 次の傍線部「思す」は、ア～ウのどれか。

> 〔中宮が女房に〕「帝こそ、よく思すらめ」

Q55. 次の傍線部「のたまふ」は、ア～ウのどれか。

> 〔帝が群臣に〕「われ、すでに**のたまふ**」

Q56. 次の傍線部「啓す」は、ア～ウのどれか。

> 〔女房が中宮に〕われ、ありさまを**啓す**。

Q57. 次の傍線部「御覧ず」は、ア～ウのどれか。

> 〔地の文〕院、御前の梅を**御覧ず**。

Q58. 次の傍線部「思す」は、ア～ウのどれか。

> 〔中宮の独白〕「われ、つらし**と思す**」

Q59. 次の傍線部「参る」は、ア～ウのどれか。

> 〔自分が〕われ、御前に**参る**。

Q60. 次の傍線部「思す」は、ア～ウのどれか。

> 〔臣下が帝に〕「君は何を**思すぞ**」

Q61. 次の傍線部「きこしめす」は、ア～ウのどれか。

> 〔帝の独白〕「われ、天の下を**きこしめす**」

Q62. 次の傍線部「申す」は、ア～ウのどれか。

> 〔臣下が〕臣、わびを申す。

Q63. 次の傍線部「のたまはす」は、ア～ウのどれか。

> 〔地の文〕帝、おもむろにのたまはす。

Q64. 次の傍線部「仰せらる」は、ア～ウのどれか。

> 〔院の独白〕「われ、かさねて仰せらる」

Q65. 次の傍線部「奉る」は、ア～ウのどれか。

> 〔臣下が帝に〕臣、御文を奉る。

Q66. 次の傍線部「大殿籠る」は、ア～ウのどれか。

> 〔地の文〕帝、はや大殿籠る。

Q67. 次の傍線部「御覧ず」は、ア～ウのどれか。

> 〔帝の独白〕「われ、いま一度御覧ず」

Q68. 次の傍線部「聞こゆ」は、ア～ウのどれか。

> 〔女房が姫に〕女房、ことよしを聞こゆ。

Q69. 次の傍線部「思す」は、ア～ウのどれか。

▶ 〔女房が語る〕中宮、もの心細しと思す。

Q70. 次の傍線部「思し召す」は、ア～ウのどれか。

▶ 〔院の独白〕「われ、ねむごろに思し召す」

Q71. 次の傍線部「奏す」は、ア～ウのどれか。

▶ 〔臣下が〕蔵人、御返りを奏す。

Q72. 次の傍線部「おはします」は、ア～ウのどれか。

▶ 〔地の文〕院、北の対におはします。

Q73. 次の傍線部「のたまふ」は、ア～ウのどれか。

▶ 〔中宮の独白〕「われ、しかのたまふ」

Q74. 次の傍線部「まうづ」は、ア～ウのどれか。

▶ 〔自分が〕われ、御堂にまうづ。

Q75. 次の傍線部「召す」は、ア～ウのどれか。

▶ 〔地の文〕帝、御車を召す。

Q76. 次の傍線部「せ給ふ」は、ア～ウのどれか。

> 〔帝の独白〕「われ、みづから定め**せ給ふ**」

Q77. 次の傍線部「承る」は、ア～ウのどれか。

> 〔臣下が〕われ、勅を**承る**。

Q78. 次の傍線部「きこしめす」は、ア～ウのどれか。

> 〔臣下が帝に〕「君は楽を**きこしめす**や」

Q79. 次の傍線部「御覧ず」は、ア～ウのどれか。

> 〔院の独白〕「われ、なほ**御覧ず**」

Q80. 次の傍線部「啓す」は、ア～ウのどれか。

> 〔女房が東宮に〕女房、御祝ひを**啓す**。

【第4部】入試 (Q81～Q100)

解答：

Q81. 次の傍線部「御覧ず」は、ア～ウのどれか。

> 〔地の文〕帝、文を取り寄せさせ給ひて、こまやかに**御覧ず**。

Q82. 次の傍線部「思す」は、ア～ウのどれか。

> 〔帝の詔〕「朕、民の憂へを深く**思す**」

Q83. 次の傍線部「奏す」は、ア～ウのどれか。

> 〔臣下が帝に〕大臣、ひざまづきて事の由を**奏す**。

Q84. 次の傍線部「思し召す」は、ア～ウのどれか。

> 〔院の独白〕「われ、世を捨てむと、年ごろ**思し召す**」

Q85. 次の傍線部「きこしめす」は、ア～ウのどれか。

> 〔中宮が女房に〕「帝は今ぞ**きこしめす**らむ」

Q86. 次の傍線部「啓す」は、ア～ウのどれか。

> 〔女房が中宮に〕女房、夜の御殿のありさまを**啓す**。

Q87. 次の傍線部「きこしめす」は、ア～ウのどれか。

> 〔帝の宣命〕「われ、四方の国を**きこしめす**」

Q88. 次の傍線部「のたまはす」は、ア～ウのどれか。

> 〔地の文〕帝、御几帳のうちより、しめやかに**のたまはす**。

Q89. 次の傍線部「参る」は、ア～ウのどれか。

> 〔地の文〕上達部、われ先にと内裏に**参る**。

Q90. 次の傍線部「大殿籠る」は、ア～ウのどれか。

> 〔中宮の御言葉〕「われ、今宵は早く大殿籠る」

Q91. 次の傍線部「おはします」は、ア～ウのどれか。

> 〔臣下が帝に〕「君は明日いづくにおはしますぞ」

Q92. 次の傍線部「承る」は、ア～ウのどれか。

> 〔臣下が〕われ、院の仰せをかしこまりて承る。

Q93. 次の傍線部「のたまはす」は、ア～ウのどれか。

> 〔帝の独白〕「われ、群臣を集めて、みづからのたまはす」

Q94. 次の傍線部「思し召す」は、ア～ウのどれか。

> 〔地の文〕帝、いとあはれと思し召す。

Q95. 次の傍線部「奏す」は、ア～ウのどれか。

> 〔臣下が帝に〕宰相、勝負の負けわざのことを奏す。

Q96. 次の傍線部「御覧ず」は、ア～ウのどれか。

> 〔院の独白〕「われ、この絵をなほ御覧ず」

Q97. 次の傍線部「思す」は、ア～ウのどれか。

> 〔女房が語る〕帝、いとほしと思すさま、こよなし。

Q98. 次の傍線部「聞こゆ」は、ア～ウのどれか。

> 〔臣下が大臣に〕われ、つてに事のよしを聞こゆ。

Q99. 次の傍線部「思す」は、ア～ウのどれか。

> 〔帝の詔〕「朕、年ごろ此の事を思す」

Q100. 次の傍線部「おはします」は、ア～ウのどれか。

> 〔地の文〕帝、御物忌みにて、内裏にのみおはします。

採点と振り返り

部	問題数	あなたの正答数
第1部 基礎	20	/20
第2部 標準	30	/30
第3部 応用	30	/30
第4部 入試	20	/20
合計	100	/100

まちがえた問題は、次の3点にもどって確認しましょう。

1. 〔場面〕は地の文か、会話・独白か。地の文なら、どんな敬語でも自尊敬語（ア）にはなりません。
2. 発話者はだれか。帝・院・中宮など最高位でなければ、ア（自尊敬語）はありえません。
3. その動作主は発話者自身か。「われ・朕」なら自尊敬語（ア）。聞き手や第三者ならイ。語が謙譲語（奏す・申す・参る等）なら、動作主が誰でもウ。

自尊敬語（ア）は「会話・独白／発話者が最高位／動作主も発話者自身」の三つがそろったときだけ。地の文の豪華な最高敬語にだまされないことが、得点への近道です。

解答：

© 個別指導塾フィット / 中本裕太 <https://kotenosenensei.com>